

雷丘北方遺跡第3次調査 現地説明会資料

1993年2月13日

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
岩永 省三

調査地 : 奈良県高市郡明日香村大字雷 (字稲葉縄手・竹ノ花)
県道橿原神宮東口停車場飛鳥線建設予定地

調査期間 : 1992年12月8日から継続中

調査面積 : 約850㎡

はじめに

雷丘北方遺跡は雷丘の北北西200m、ギオン山の南西80mほどの位置にあたり、西方約100mを飛鳥川が北流する。藤原京の条坊では左京十一條三坊西南坪の中心部にあたる。1990年以前には、当遺跡周辺では発掘調査が行われていなかったが、1991年4～7月に今回調査区の北側で第1次調査、1991年12月～1992年3月に今回調査区の西側で第2次調査をおこない重要な知見が明かとなった。すなわち、①藤原京左京十一條三坊西南坪のほぼ中軸線上に大規模な四面庇付東西棟建物がある。②その西方に長大な南北棟建物が2棟南北に並ぶ。③建物群の西と南に掘立柱塀とその外側の溝とが組み合った区画施設が存在する。④以上の遺構は天武朝末期に造営され藤原宮期を経て、奈良時代に廃絶した。今回の調査では、東脇殿想定位置 (A区) と門想定位置 (B区) に調査区を設け、第2次調査区と飛鳥川との間にも小調査区 (C～F区) を設けた。

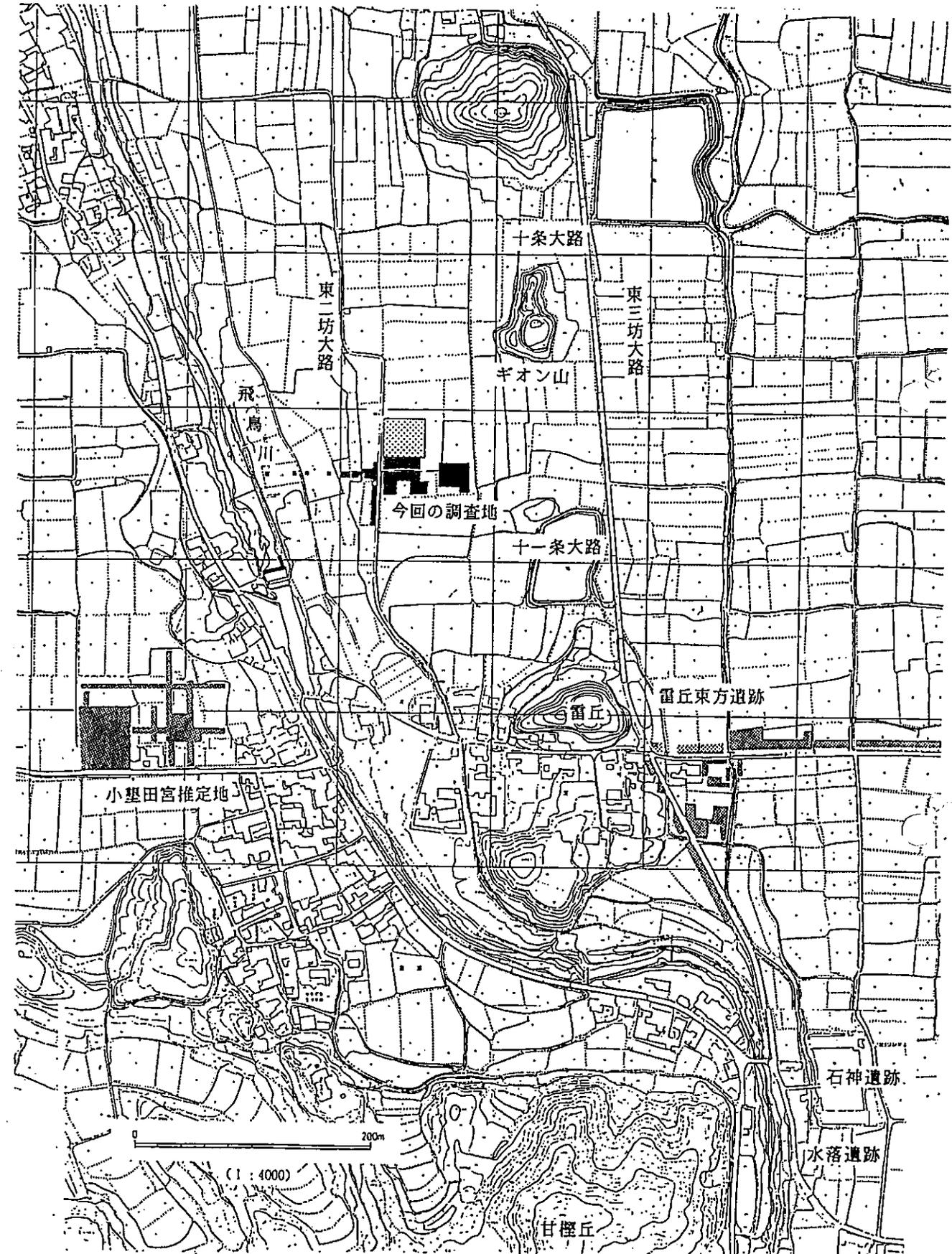
遺構

調査地の地形は南東が高く西北へ低くなり、遺構は大規模な整地後に造られる。検出した遺構はA・Bの2時期に分けられる。

A期 掘立柱建物1棟・掘立柱塀3条・溝4条がある。

建物01は、建物2661を正殿、建物2670を西脇殿とした場合の東脇殿に当たる。掘立柱の南北棟建物で6間分を検出した。建物2670は東西2面のみに庇が付いたが、建物01は東西に加え南にも庇が付く。南から4・5間目の間に間仕切りがある。柱間寸法は身舎が8尺等間、底の出が7尺。検出した柱穴13ヶ所のうち5ヶ所に柱根が残り、他は抜き取られていた。底の柱穴は一辺0.4～0.7mと小さく、柱穴17ヶ所のうち5ヶ所に柱根が残り、他は抜き取られていた。柱の直径は約15cmと細い。建物の身舎部分に玉石敷が施されている。石敷面は建物中心部が高く、周囲がやや低くなる。

塀02は建物01の東6.3mにある掘立柱の南北塀で、西脇殿2670の西側の南北塀2745と対応し、この遺跡の中心部分の東限を区画する施設である。8間分を検



出し、南端で東西塀2735と接続し、L字形に区画施設の東南隅部を形成する。建物01と柱筋を一致させ、柱間寸法は、北から5間目までが8尺等間、6間目が7尺、7間目は東西溝2730を通すためか13尺と広く、8間目は6尺と狭い。3ヶ所に柱根が残り、他は抜き取られている。塀02と建物01との距離(6.3m)は、塀2745と建物2670との距離(5.0m)より大きい。

塀03は建物01と塀02をつなぐ掘立柱の東西塀で、建物01の南から5本目の側柱と塀02の南から7本目の柱に取り付く。この位置は建物01の間仕切りと対応する。塀は3間あり柱間寸法は7尺等間である。

塀2735は建物01の南5.7mにある掘立柱の東西塀で、この遺跡の中心部の南限を区画する施設である。長さは約78m(264尺)あり、柱間寸法8尺等間の33間に復原できる。A区で1間分、B区で5間分を検出した。

溝2730は建物01の南約0.8mにある東西石組溝である。塀02以西では幅約0.8m、深さ約0.2mであるが、以東では大きく広がり調査区東端で幅約3mである。

溝2740Aは塀2745の南にある大規模な東西溝である。B区で北半を検出した。第2次調査区では塀2735の1.2m南に北岸があるが、東に行くほど北岸が南に偏し、A区には及んでいない。深さ約0.85mである。北岸に約1m間隔で丸太を打ち込んだしがらみの護岸がある。7世紀後半の土器が少量出土したが、木簡は出土しなかった。B区東端に溝2740に流れ込む南北溝08・09がある。

B期 溝2730が埋め立てられ、建物01・塀2735・溝2686に囲まれた空間に礎数2685が施される。建物01と塀02の間に礎数04、塀02の東側に礎数05が施される。溝2740は北岸が南へ移動し溝2740Bとなり、塀2735の北側から溝2740Bへ排水するための暗渠10・11が造られる。

礎数2685は拳大の礎を粗く敷いたもので、表面は凹凸が著しい。礎数04・05は拳大から人頭大の礎を粗く敷いたもので、後世の攪乱が著しい。礎数04の南端近くに礎・瓦敷施設06がある。その東北隅から丸瓦を並べた溝07が出る。

溝2740Bは北岸が塀2735の南約4mにあり、北岸のみ検出したため、幅・深さ共に不明である。7世紀後半の土器が出土した。暗渠10は幅30~45cmの掘形の中に、丸瓦を並べ重弧文軒平瓦・平瓦で蓋をし埋め戻したもので、平瓦には凸面布目がある。暗渠11は幅約0.3mの掘形の中に木材を置いたものである。

遺物

瓦類・土器類・金属製品などがある。その多くは礎数上面から出土した。瓦類は建物01と塀02の周囲に多い。軒瓦には大官大寺式が多く、ほかに四重弧文軒平瓦が目立つ。土器類は溝2740A・B、溝2730から少量出土し、大半は礎数上面から出土した。7世紀後半のものが多い。溝2730出土品には漆運搬用の須恵器壺、漆のパレットに用いた土師器杯、表面に漆を塗った須恵器鉢などがあり、ほかに硯2点、7世紀代の土馬1点、富寿神宝2点がある。

まとめ

①、この遺跡の中心部には四面庇付きの正殿を中心に、その東西両側に南北棟の脇殿が建つ。西脇殿は2棟の南北棟が南北に並ぶので、東脇殿も同様であったと想定できる。

②、この遺跡の中心部分の東西規模は約78m(264尺)である。

③、正殿は四面庇付きで、柱間寸法が大きく、柱掘形もきわめて大型である。藤原京内で今までに判明している邸宅跡の正殿と比較すると、その規模の大きさが際だっている。また、脇殿も東西二面あるいは東西南の三面に庇が付き、西南脇殿の17間に匹敵する長大な建物は京内では知られていない。

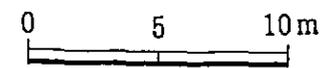
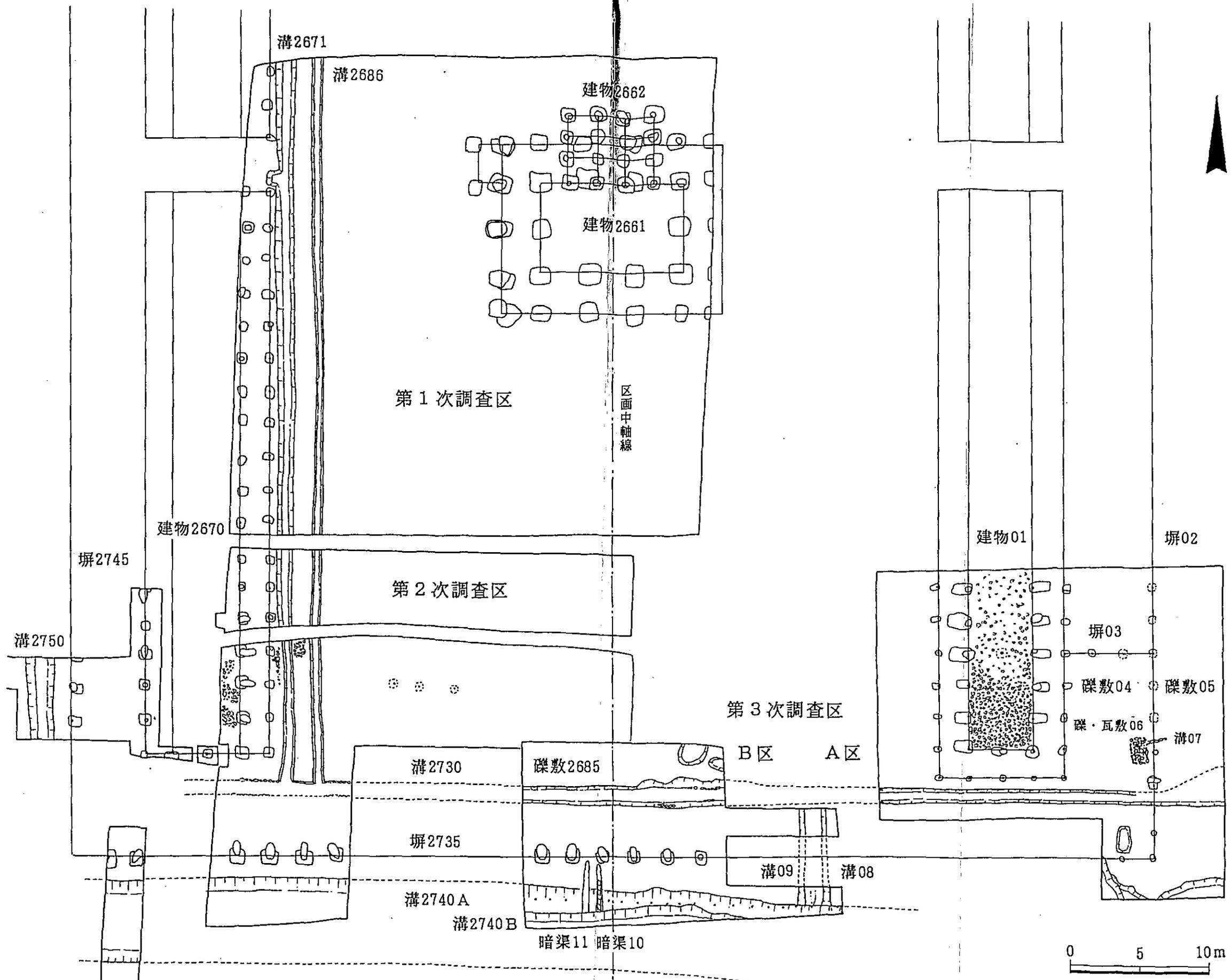
④、遺構の配置にはその位置・距離などにある程度の計画性が窺える。たとえば、西北脇殿の南妻は正殿の北庇柱筋と揃い、東西両面の南北塀は脇殿と柱筋を一致させている。南面の東西塀の位置は正殿の心から150尺である。しかし、厳格な左右対称ではない。たとえば、正殿の中軸線から西脇殿の中軸線までの距離は100尺であるが、東脇殿の中軸線までの距離は96尺である。西南脇殿の身舎の南妻と南面の東西塀との距離は24尺であるが、東南脇殿の場合26尺である。また、東脇殿の西側には溝がなく、東面南北塀の東側にも溝がない。

⑤、建物群の東・西・南側に掘立柱塀の区画施設が存在し、西面と南面には塀の外側に溝がある。南面の区画中軸線上には柱列が複数並ぶ門はなく、塀の外側の溝に橋も掛かっている。

⑥、正殿の中心は十一條三坊西南坪の中軸線にほぼ一致し、南脇殿の南妻の位置もほぼ坪の南北二分線に合う。こうした状況と遺構の存続時期からみて、この遺跡は条坊に則したものと推定してよい。また、北脇殿の規模は不明であるが、南脇殿の半分と見積っても西北坪へ及ぶことは確実で、少なくとも南北2坪を占地していたことが明かである。

⑦、3回の調査によって、この遺跡が大規模な整地を行った後に形成されていること、占地・規模・建物配置・時期などについてその一端を明らかにすることができた。しかしながら、この遺跡の性格に関してはなお不明な点が多い。寺院、貴族の邸宅、官衙、宮などが候補として挙げられるが、建物の規模、形態、出土遺物などから前2者には無理がある。正殿と脇殿からなるコ字形の建物群は政治的な場としての機能が考えられるので、官衙の可能性もある。しかし、先に推定した建物配置について、北脇殿を南と同規模とし、さらに正殿の北に後殿の存在を想定すると、飛鳥稻淵宮殿の建物配置と極めて類似した形態となる。雷丘北方遺跡の場合、少なくとも2坪を占地しており、建物群の南方・北方にかなりの空間があるため、ここに生活の場を想定すると宮としての性格付けも不可能ではない。今回の調査範囲は中心区画部分に限られたため、遺跡の性格を明らかにする手がかりが十分得られなかった。

⑧C~F区では、飛鳥川の氾濫で遺構は削平されていた。



雷丘北方遺跡遺構配置図